



Title	昭和初期の書物本文組版についての考察 : 夏目漱石『吾輩は猫である』再刊本を中心に
Author(s)	吉羽, 一之
Citation	デザイン理論. 2017, 70, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/65055">https://doi.org/10.18910/65055</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 昭和初期の書物本文組版についての考察

— 夏目漱石『吾輩は猫である』再刊本を中心に —

吉羽一之／千葉商科大学

## はじめに

大正12（1923）年、関東大震災以降、書物は単行本や全集、文庫本など、それまで以上に多様な形態で刊行されている。夏目漱石（以下、漱石）の『吾輩は猫である』（以下『猫』）はその刊行歴を辿ると、初刊本は明治38（1905）年に大倉書店・服部書店から刊行され、その後増刷を繰り返して、明治44（1911）年に縮刷本として、また漱石が死去した翌年、大正6（1917）年に漱石全集の中に組み込まれている。昭和初期における『猫』は、漱石全集として、また円本全集として、さらには縮刷本として刊行されていたが、昭和5（1930）年に全集に属さない単行本として再刊本が刊行された。本研究は、これらの多様な出版形態の中の本文組版に着目し、円本全集のように大量生産を目的とした書物に見られる量産型組版と、純粋造本と呼ばれる書物に見られる手工型組版を比較しつつ、『猫』再刊本の本文組版を考察する。

## 『吾輩は猫である』再刊本

再刊本はその跋文に岩波書店に著作権が昭和5（1923）年に獲得されたことを機に刊行されたこととある。また、同じく跋文より安価に刊行できたこととあるが、これは大正6（1917）年に漱石全集刊行会から刊行された漱石全集の紙型を使うことで、新たに活字組版を行わずに印刷できたためであり、それぞれの紙面を比較すると本文のみならずノンプルまで一致することが確認できる。

再刊本の書誌について、初版発行日が昭和5（1930）年10月15日、発行所は岩波書店、印刷所は凸版印刷株式会社、『猫』の全10章

が収録されている。ページ構成は本文が463ページ、装幀者は跋文より岩波書店の岩波茂雄と推察できる。再刊本の本文設計（表参照）は活字の書風やインクのにじみに加えて、総ルビであることから紙面の黒みが強いが、当時の照明器具等の読書環境を想像すると適切な設計という見方も考えられる。

## 円本全集

再刊本の比較分析として、当時、読者層が最も多かったと推察される円本全集を取り上げる。円本とは、大正15（1926）年改造社から配本された文学全集を皮切りに、各出版社から1冊1円で刊行された全集のことで、ジャンルは文学作品だけでなく、美術、思想、経済など多様であり、一大ブームとなった。関東大震災以後に大衆が活字に飢えていたことや大量生産が可能となった印刷技術がこのブームの背景にある。円本全集は数多く刊行されているが、ここでは『現代日本文学全集』『世界文学全集』『明治大正文学全集』『現代大衆文学全集』を取り上げる。

『日本現代文学全集』、ここでは『猫』が収録されている第19編の書誌について、初版発行日が昭和2（1927）年6月5日、発行所は改造社、印刷は秀英舎、収録作品は『猫』の抄とその他、漱石の作品13点である。ページ構成として本文404ページ、装幀者は杉浦非水である。本文設計（表参照）において、行間は一定の数値で計測できなかったが、当時の組版に使用された誤差と一致する幅のインテルが存在しているため、一概に経年劣化とは決められない。『世界文学全集』第12巻『レ・ミゼラブル(1)』の書誌について、初版

	中綴 (mm)	組版面積率 (%)	活字サイズ (号)	字幅 (mm)	行幅 (mm)	行高 (mm)	行数 (行数)	行数 (行)	文字数 (部)
『現代日本文学全集 第十九巻』	150×222	79.85	8号	45	25	25	21 (2段組)	24	1512
『世界文学全集 (121)』	137×197	64.8	6号 (8号)	45	25	25	26 (2段組)	21	1062
『明治大正文学全集 第二七巻』	134×189	72.57	6号 (8号)	45	25	25	26 (2段組)	22	1144
『現代大衆文学全集 第二巻』	130×190	58.5	8号	45	25	25	45	15	675
『巨獣は渾である』 四行本	128×189	58.9	8号	45	25	25	47	17	799
『五世全本』									
池田謙『聖家族』	125×166	41.6	5号	45	25	25	30	11	330
芥川龍之介『地獄變』	167×212	45.45	5号	45	25	25	31	12	372
堀辰雄『風立ちぬ』	152×200	29	8号	45	25	25	34	12	408

発行日が昭和2（1927）年3月15日、発行所は新潮社、印刷所は富士印刷、収録作品は『レ・ミゼラブル』の第1部と第2部、ページ構成は本文が508ページ、装幀者は恩地孝四郎である。本文設計（表参照）の特徴として、カタカナの拗促音が半角で組まれている点があげられる。『明治大正文学全集』、ここでは『猫』が収録されている第27巻の書誌について、初版発行日が昭和2（1927）年9月15日、発行所は文学作品の代表的な出版社である春陽堂、印刷所は日東印刷、収録作品は『猫』の抄を含む漱石の作品9点である。ページ構成として、本文622ページ、装幀者は『世界文学全集』と同様、恩地孝四郎である。本文設計（表参照）は『世界文学全集』との共通点が多く見られるが装幀者が同じという点からの理由が推察される。『現代大衆文学全集』第3巻の書誌について、初版発行日は昭和2（1927）年10月5日、発行所は平凡社、印刷所は平凡社印刷部、収録作品は江戸川乱歩の作品が18作品、ページ構成は本文が1045ページ、装幀者は限定できない。本文設計（表参照）は版面面積率も大きくなく、またノドが開きやすい製本方法が選択されているため、厚みのある造本ではあるが、可読性は情報量に阻害されていない。

### 純粹造本

純粹造本は堀辰雄、江川正之（江川書房）、野田誠三（野田書房）によって、昭和初期に確立された手法である。円本全集とは対極にあるようにも思われるこれらの書物の本文組版も分析対象として取り上げ考察を試みる。取り上げる書物は、昭和7（1932）年2月20日に江川書房より刊行され、印刷は白井赫太郎、定価2円の堀辰雄『聖家族』、昭和11（1936）年4月25日に野田書房より刊行され、印刷は赤塚三郎、頒価5円の芥川龍之介『地獄變』、そして昭和13（1938）年4月10日に野田書房より刊行され、印刷は松村保、定価2円の堀辰雄『風立ちぬ』である。それぞれの本文設計は表を参照されたい。

### おわりに

明治から昭和初期にかけての傾向として、判型には大きな差はないが、時代が進むにつれ、版面面積率は増加が見られ、活字は小さく、行間が狭くなっている。『猫』の再刊本はどの項目も円本全集と純粹造本の間接値を示している。円本全集が工業化社会における大量生産された書物とするならば、純粹造本は限定版出版を主としたウィリアム・モリスのプレヴェートプレスのな書物であり、再刊本は工業化社会を受け入れつつも可読性を重視した書物本文組版だと言える。